



Title	<書評>『こんな親が危い : 登校拒否児をつくらないための30章』 (大橋威朗著, 中央法規, 1,300円)
Author(s)	雅
Citation	大阪公衆衛生. 1988, 54, p. 28-28
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/83716
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

『こんな親が危い』

—登校拒否児をつくらないための30章—

大橋威朗著（中央法規1,300円）

題名に引きつけられ、1年前に父親になったばかりの私は、この本を手にした。『こんな親』とは、ひょっとしたら私のことではないかという恐れが多分にあったからである。

両親がそろっていて、経済的にも問題がなく、心身に異常がないにもかかわらず1年も2年も登校できない登校拒否児。

この本は、23年間、児童指導員として中日青葉学園で500人以上の登校拒否児の指導にあたってきた著者が経験をもとに、私たち、「親」に30の提言を行っている。その提言は、素人目にはおよそ登校拒否とはかかわりのないようなものから始まっている。

まず、結婚相手の選び方。著者は、学園に実習にくる女子学生に対して、次のように話すと言う。

「妻としてのあなたには、夫は100%優しくてもいいのですが、父親としては、90%の優しさと10%の厳しさが必要なのです。これが天国と地獄の分かれ道…。登校拒否児の父親の80%は優しき100%なのです」。

さらに「良い子すぎるのは悪い子」「給食嫌いにするな」「勉強に代償はいらない」「看病としつけを区別せよ」「深夜放送好きには要注意」など興味深い提言が続く。

しかし、30章におよぶ提言の中で著者が一貫して力説したいのは、“最大の原因は、親の過保護、誤った愛情による子供のけじめのない生活習慣である”ということのようだ。

すでに学校に行くことを嫌うようになってしまった子供をもつ親だけでなく、むしろ、うちの子は大丈夫だとタカを括っている親にこそお勧めしたい本である。（雅）